

# イギリス旅行記 1975年7月—9月

T. グレイをめぐる断片 (2—3)

ストウク・ポウデズ (2部)

山 本 博 信\*

Journal of a Literary & Historical Pilgrimage to the British Isles  
July-September, 1975

Fragmentary Notes on Some Places Associated with Thomas Gray (2—3)

Stoke Poges (Part 2)

Hironobu YAMAMOTO

## ACKNOWLEDGEMENTS

This paper is continued from the article with the same title by the present writer in the last number of the *RESEARCH REPORTS OF UBE TECHNICAL COLLEGE*, 1980.

To Mrs. C. Hodsoll, of Stoke Poges Gardens, whose kindly assistance is gratefully acknowledged in my preceding article, I am indebted once again for her never-ending willingness to offer me the latest information concerning the places in Stoke Poges to be referred to here.

I must also gratefully acknowledge my indebtedness to Mr. D.J.C. Sutherland, Chairman and Managing Director of Miles Laboratories Ltd., Stoke Poges, for permission to use the photographs of Stoke Court building and for information on the place.

### 3. Stoke Poges

**Manor House** グレイの眠る教会 **St Giles's Church** のすぐ裏手に、この地の荘園領主の豪邸マナー・ハウス (**Manor House**) がある。別名、ストウク・ハウス (**Stoke House**) ともいわれるこの **Stoke Poges** の地主屋敷は、教会の **vestibule** から北へ百二、三十メートルのところにある。今でこそ、樹林にさえぎられて見えないが、今世紀の初頭には、教会の北裏の木立の上に古風な煙突群が見えていた、とゴス (**E. Gosse**) は云っている。グレイの時代には、コツバム夫人 (**Lady Cobham\*\***) がこの邸宅の主人であった。彼が足繁く訪れた

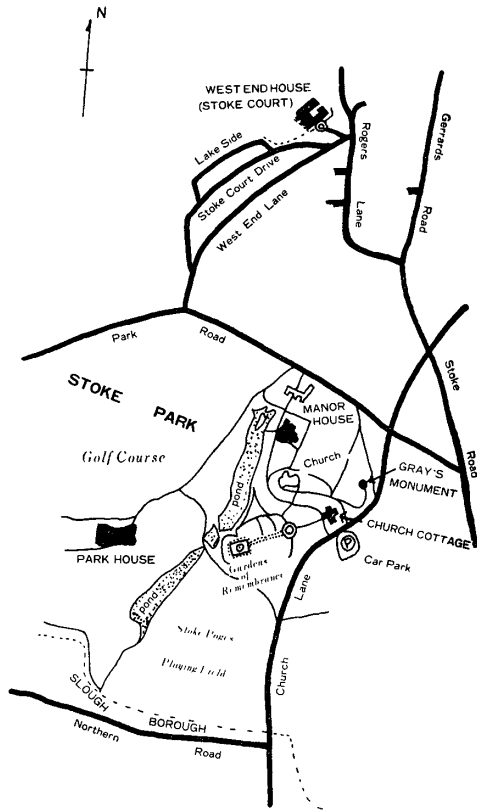
ところだ。アン伯母の死後の1759年には、ここに逗留したことは既に述べたとおりである。

グレイがこのマナー・ハウスを訪ねはじめるのには曰く付のきっかけがあり、その出来事をグレイは「なが物語」(*A Long Story*) の中でおもしろおかしく書いている。事は1750年に起ったのである。この年の夏、例によって、ストウクに帰省中のグレイは *Elegy* を完成し、それを友人ウォルポウルへ送る。ウォルポウルはこれをロンドンの上流社交界に回覧しているうちに、このマナー・ハウスのコッバム夫人の目にとまる。夫人は、その

---

**\*\*Anne, Dowager Viscountess Cobham, widow of Sir Richard Temple, Field-Marshal (nee Anne Halsey)**

\* 宇部工業高等専門学校英語教室



*Elegy* の作者グレイが自分の村に居ることを知り、面会したいと思う。丁度、その頃マナー・ハウスには夫人の友人のショーブ夫人 (Lady Schaub\*) が滞在中で、面会の作戦計画を立てる。この計画は、コツバム夫人の立案というより、ショーブ夫人の立案だったかも知れない。ショーブ夫人はロンドンの社交界では「派手な」(‘gallant’) ことで評判だったというから。それに、コツバム夫人と同居していたスピード嬢 (Miss Speed\*\*) が積極的に後押ししたことが考えられる。陽気で活発な女性

\* Nismes の仏人未亡人、プロテスタント。Sir Luke Schaub と再婚。〔Luke Schaub 卿はスイス人で、Basle の生れ。彼は、コツバム夫人の夫 Lord Cobham が1715年 Vienna で大使 (ambassador) をしていた時の秘書で、のちに初代 Earl of Stanhope の秘書になる。1720年ナイトに叙される。翌年、パリ大使 (21-24年まで)。1758年死亡。〕 Schaub 夫人は、ロンドン Hampton Court Palace に、多年にわたり、apartments をもち、時の社交界に異彩を放つ。ハンプトン・コートで1793年死。

\*\* Henrietta Jane Speed (1728-1783)。3才で父 Samuel Speed (陸軍大佐) を失う。母は Cardonnel Jones。Holyrood に生る。

だったというから。実際、計画はこの二人の女性によって実施に移される。ショーブ夫人の友人であるブラウン夫人 (Lady Brown\*\*\*) がグレイの知人であることを利用する作戦だ。時は1750年、夏。マナー・ハウスより二人の貴婦人がグレイ引き出しにかかり、詩人の住むウエスト・エンド・コティヂ (West End Cottage) を訪ねる。幸か不幸か、グレイは散歩にでもでていたか、不在。そこで二人のうちの一人ショーブ夫人は、グレイがいつも読書する応接間の紙切れの一枚に、次のように書きのこして帰った：「ショーブの家内よりグレイ様へ。ご在宅になられず、残念に存じます。が、ブラウン夫人はまことにご壮健でありますことを申し上げさせて頂きます。」(Lady Schaub's Compliments to Mr. Gray; she is sorry not to have found him at home, to tell him that Lady Brown is very well.) 婦人から訪問を受けて、その答礼をするのは礼儀である。グレイは、こうしてまんまと‘敵’の作戦にひっかかって、マナー・ハウス訪問の仕儀となるのである。

この頃、すでに、グレイの名はストウク・ポウヂズの村中に知れわたっていたようだ。「『名声』が P...t 氏の姿をかりて (今では村人たちはみな知っている)、おしえたのだ、『詩人』といういたずら『小鬼』がこのあたりに潜んでいると。」(‘Fame in the shape of Mr. P...t/ (By this time all the Parish know it)/ Had told, that thereabouts there lurk'd/ A wicked Imp they call a Poet,')\*\*\*\* 「二人組の戦士」(‘a brace of warriors’) なる二人の貴婦人が、皮の軍服 ‘buff’ ならぬ「金紗銀紗の薄絹をなびかせて」(‘rustling in their silks and tissues’), グレイの伯母宅ウエスト・エンド・コティヂへやって来たのは、まだ午前中のことであった。先陣のショーブ夫人は、「頭为天辺から爪先まで、フランス仕立て」(‘The first came ap-a-pee from France’). 「片や一方のアマゾン」なるスピード嬢は「生氣と知恵と皮肉で天与の武装をしていた。がコツバムの神が、磨きをかけて、その矢じりの先には善人の氣立てがつけてあった。」(‘The other Amazon kind Heaven/ Had arm'd with spirit, wit, and satire :/ But COBHAM had the polish given,/ And tip'd her

\*\*\* 3rd Earl of Salisbury の二男 Hon. Robert Cecil の娘, Margaret (1696-1782). wife of Sir Robert Brown で、外国人歌手のパトロンとして活躍。当代社交界の第一人者。

\*\*\*\* *A Long Story*, ll. 41-44

arrows with good-nature.)\* こうして、「詩人は不思議な心の乱れを感じて」(‘The poet felt a strange disorder’), 女軍の軍勢の‘まじない’(a spell)の前にあえなく降ってしまう。グレイは、「まるで悪魔に追いつたてられるようにして、大邸宅へ行った」のである(‘to the Great House/ He went, as if the Devil drove him.’)\*\*.

それが何日のことであるかは、わからない。8月か9月のはじめであろう。ショーブ夫人の残していった書きおきには、‘1750年9月’という日付が入っているが、これはメイソンがのちに「備忘録」を編纂したとき推測で記入したもの。また、この訪問面会のいきさつを書いた *A Long Story* の手稿(ペンブルックの *Commonplace Book* 中)には、グレイの自筆で8月(‘Aug: 1750’)の書込みがあるが、グレイの誤り。詩の内容からして、この詩が9月13日以前に書かれた筈がないため、この「8月」はマナー・ハウス軍の攻勢とグレイの降伏の時期、つまり、マナー・ハウスとウエスト・エンド・コティヂの間の往復訪問があった時期を示すものとも解される。そして詩が書き上げられたのは9月中旬、またはそれ以降、ということになる。この詩の120行目、「彼はものもいえず立っていた、あわれなマッククリーンのように。」(‘He stood as mute as poor Maclean.’)の‘マッククリーン’\*\*\* にグレイは注を付している: ‘A famous Highwayman hang’d the week before’ (一週間前に処刑された有名な強盗。) マッククリーンが処刑されたのは1750年10月3日のことだから、この詩の書かれたのは10月10日頃だとも考えられる。しかし、このグレイの書き込みの注をもつ原稿はマナー・ハウスの女性たちへ送ったも

\* *ibid.*, ll. 29—32

\*\* *ibid.*, ll. 87, 88

\*\*\* James Maclaime or Maclean (1724—1750). グレイは ‘Maclean’ と書いている。彼は二人組で、1749年11月のある夜(10時頃という)、帰宅途中のグレイの友人ウォルポウルをハイド・パークに襲う。ピストルを発射したが、弾は顔をかすめてそれ、未遂に終る。ウォルポウルは九死に一生を得た。この事件は *The London Evening Post* (1749年11月9—11日付け) に詳しく報じられている。グレイも気づかって、12日にウォルポウルあてに手紙を出している。翌50年7月捕えられ、Old Bailey で裁判にかけられ、10月3日 Tyburn で処刑される。時に26才。スコットランドの長老派牧師の二男で、兄は有名な聖職者 Alexander Maclaime.

のではなく、後日、ホートン(Wharton)か誰かに与えた写しの原稿であろう。マナー・ハウスの女中や使用人など、マナー・ハウスの人々には不要と思われる注まであるからだ。「10月10日」は詩ではなく、「この原稿」を書いた日付とも考えられる。これより先、9月13日に公判が開かれ死刑の判決をうけた時、悪党マッククリーンは何の弁解もできず、ただ、「何もいえません」(‘I cannot speak, my Lord.’), としかいえなかったという。「彼はものもいえず立っていた、あわれなマッククリーンのように」は、このことを云っていると思われる。従って、9月13日以後の作という訳だ。それは10月3日より一週間後の10月10日でも矛盾しない。10月のある日曜日には、グレイはスピード嬢からこの詩の礼状をうけとり、翌日の食事に招かれている。むろん、グレイはその招待をうけたことであろう。

この詩は、のちの1753年、「ベントリー氏装画グレイ氏六詩集」\*\*\*\* に収められる。その挿画のために、グレイは1752年7月8日付けのウォルポウルへの手紙にマナー・ハウスのスケッチを同封している。これは鉛筆による簡単なデッサンであるが、長い煙突、突き出した窓、高い三角形の破風を多くもったチューダ風の建物が、画面の下1/4から1/2までのスペースに帯状に横に長く描かれている。*A Long Story* 口絵には、これをもとに画かれたベントリー氏の絵があてられている。

ところで、この館にコツバム夫人が居住したのは、夫のテンプル卿(Sir Richard Temple)\*\*\*\*\* の死後というから、1749年ということになる。しかし、もともと、マナー・ハウスは彼女の父 E. ホールスリー\*\*\*\*\* が、1720年頃、Gayer 家より買取ったものといわれているので、それ以前にも彼女は住んでいたかも知れない。1752年頃にはコツバム夫人の所有になっていたという。このコツバム夫人は姪だといわれるスピード嬢を、その兄のサミュエル・スピード\*\*\*\*\* が1747年に戦死して以後、引

\*\*\*\* “Designs by Mr. R. Bentley, for six poems by Mr. T. Gray.” 3月29日, Dodsley より出る。

\*\*\*\*\* 1749年死. Stowe, Bucks. の人. Field-Marshal (陸軍大將). 初代コツバム子爵 (1st Viscount of Cobam) ウインザー御料林監守 (Ranger of Windsor Forest).

\*\*\*\*\* Edmund Halsley, Esq. Southwark 及び Stoke Poges に本拠をもつバッキンガムシャー選出国會議員(1717—22). Southwark に有名なビール会社を創設。

\*\*\*\*\* Samuel Speed (1716—1747), Lieutenant-Colonel. スピード嬢の唯一人の兄. Bergen-up-Zoom で戦闘中死ぬ。

取って養育していた。子供のいないコツバム夫人は、このスピード嬢をわが子のように可愛がり、1760年3月20日、死んだ時には、彼女に莫大な遺産をのこした。グレイによると、それは、「少なくとも30,000ポンドとロンドンの家、その他皿、陶磁器類」などであった。スピード嬢はそれから半年ばかり後、3,000ポンドでロンドンにチュート (John Chute) の家を買取ったと、ウォルポウルが云っているほどだ。グレイもこのコツバム夫人から20ポンド\* を mourning ring\*\* の代金としてもらっている。

グレイは1750年夏の例の事件を契機に、以後10年近く、このマナー・ハウスへ足しげく通うことになる。イートン時代からグレイとウォルポウルを知っているというブライアント (Jacob Bryant) という人も、グレイがマナー・ハウスをよく訪ねていたと言いのこしているほどだ。

このグレイと館の娘スピード嬢が、やがて、親密な仲になって行っても不思議はない。前に触れたグレイのそばに眠るダックワース尊師 (the Rev. Duckworth) の息子、海軍大将ジョン・トマス・ダックワース卿は、1度ならず、グレイとスピードの二人が馬車にのって村の小道を、彼女の手綱さばきで、走っているのを目撃したと云っている。二人の仲は、そのうち、結婚するとうわさされるまでになる。コツバム夫人もこの二人の取り合せて好意的であったという。その夫人が死の病におかされていた1759年には、スピード嬢は誰もいないからお願いだから来てくれと、グレイに頼んでいる。グレイもそれに応じて、9月23日にマナー・ハウスへ赴き、スピードと二人でコツバム夫人に付添ったことはすでに述べた。コツバム夫人の死後も二人の関係は親密で、旅行を計画するほどだった。夫人の死から3ヶ月余り後の6月末には、Oxfordshire へスピード嬢と旅行に出かける。そして二人でジェンクス夫人の家 (Grovelands, Shiplake) の客になり、4週間近くを過ごしている。ところが、この旅行を境にして、グレイとスピードの関係は進展するどころか、後退の兆を見せはじめる。スピードとの旅から帰って、3ヶ月にしかならない10月21日

\* グレイの「日記手帳」の4月15日のところに、次の通り：‘Received £21 Lady C’s legacy.’

\*\* wedding ring の代金とも考えられる。グレイのスピード嬢への結婚申込みを期待した上での夫人からの遺贈という訳だ。cf. A. L. Lytton Sells: *Thomas Gray: His Life and Works*, p. 95

付けのホオートンへの手紙の中でグレイは自嘲と諦めの口吻をまじえて次のように云っている：「コツバム夫人の生前、スピード夫人 (Mrs. Speed) と私の二人は遺言書作製のため夫人のところに詰めっきりで、後日二人は結婚することになっているのだと、世間では云っていた。」それからまる一年、翌61年10月にはグレイは、スピード嬢に乞われて、はかない恋歌、牧夫‘サーシス’ (‘Thyrsis’) のうたを彼女に献じている。それはこういう文句ではじまる：

私たちが別れた時、サーシスは誓った、  
春までにはきっと帰ると。…  
(Thyrsis, when we parted, swore,  
E'er the spring he would return.)

しかし、どういう訳か、翌月の11月12日、スピードはイタリアはサルゼニア王国の貴族、ペリエイ男爵ジョゼフ・マリーア\*\*\* (1737—1810) と結婚する。ジョゼフの父親ヴィリイ伯フランシス・ジョゼフが、当時、サルゼニアのロンドン公使 (1755—63) であったことから、息子のジョゼフも、丁度、滞英中だったのであろう。式はサルゼニア大使館の礼拝所になっていた Lincoln's Inn Fields Chapel で、ローマン・カトリック教会の儀式に従ってとり行なわれた。グレイは、これを限りにロンドンの下宿引払いを決意、それから1週間後の11月19日にケンブリッジへ引きあげている。なんとあっけない幕切れか。

二人の間に何事が起こっていたのか、未だに謎なのだ。しかし、グレイは恋歌の中にひそかに訣別の意を込めていたのかも知れない。グレイがいつ彼女の結婚を知ったかは不明だが、それにショックを受け苛立ち、自からを慰めようとしていたことは確かなようだ。スピード嬢が結婚して間もない1762年1月11日、友人ウォートンへの手紙の中で、彼はこう云うのである：

「私の古くからの友人スピード嬢は世間でいう馬鹿なことをしてしまったものです。サルゼニア公使ヴィリイ伯の息子ペリエイ男爵と結婚したのです。彼

\*\*\* Joseph Marie de Viry, Baron de la Perrière. ハーグの公使を振り出しに、ロンドン (1766)。マドリッド、パリの公使を歴任。1766年には父の死によりヴィリイ伯 (Comte de Viry) となる。父のフランシスは、のちに、チューリン (Turin, 現在トリノ) の宮廷の外務大臣になる。

は28才ぐらい（自分より10才も年下）\* ですが、40に見えます。これは淫乱放蕩の結果なんかじゃないさ。彼はまじめな男なんだから。」

もしかすると、グレイは結婚前に彼女の相手の男爵に会ったことがあったのかも知れない。この文面からも、なにかスピードに対する未練を禁じえなかったことが窺える。彼は彼女の年齢を4才も間違えるほど混乱している。

何故グレイはスピードと結婚しなかったのか。仮に、この結婚の不成立の原因がグレイの側にあったとすれば、グレイがスピード嬢との結婚に踏み切らなかった理由の一つは、1760年6月20日、彼女との旅を前にして、友人ホートンにあてた手紙にあるように思える：

「私は、ここ3週間ずっと、スピード女史とオックスフォードシャーへ行くことにしていたのですが、

（二、三度ちょっと出かけはしたものの）まだロンドンにいるのです。ところが、この間に、彼女にいわすと彼女の事情でだが、私にいわすと、彼女の気儘で、彼女は10遍も気を変えたのです。いや、なにも不思議はない。どうみても、3万ポンドの金のほかに、ロンドンに家を一戸、皿、宝石、陶磁器と莫大な財産を自分のものにしたのだから。実際、そういう女には、自分の心、本当の自分の気持がどうなのかを知るなんて馬鹿げたことなんだ。私は自分の本心は心得ているから、必ずケンブリッジへ参ります。でも、あの阿呆の総長\*\*が出る卒業式があるので、私はその下らぬ行事が終るまでは仕方なく当地にとどまっています。」

スピード嬢はコツバム夫人から厩大な遺産を残されたばかりに、金にあかして、我ままで気まぐれな行動をとっていたものと思われる。グレイは、あの若き日のウォルポウルに見たものと同じものをそこに見て、彼女に対する心が閉じたのではないか。スピード嬢は陽気で愛想がよく、*A Long Story*にもある如く活発で才気にとみ、ユーモアとウィットにあふれる女性だったという。細身ではないが背は高く、やや色黒で、目と歯がとくに美し

\* グレイは過大に見積っている。スピードは1728年1月生れで、34才。38才ではない。また、男爵は28才でなく、25才だから、9才年下ということになる。

\*\* Duke of Newcastle. 'Owl Fobus' とあだ名さる。

かったという。美人を銜うこともない、気さくで上品なものごしというのがスピード嬢像だ。彼女は特に文人、インテリとの会話を好み、だれも一緒にいて、怒らせたりに不快な思いをさせたりしたことはなかったという。何人に対しても憎しみや嫌悪を感じないかわりに、愛情も感じないような女、本当には誰も愛したことののないような女だったのであろう。人好きのする女ではあっても、淡白すぎて感情に乏しく、平板で散文的なところのある女性ではなかったかと思われる。そういう女性が泰然として我まを云ったりやり出したりすると、グレイならずとも、たいていの男は閉口するであろう。グレイが彼女との結婚に踏みきれないまま、若い男と結婚されてしまうに到ったのは、こういう女性、いや、こういう人間に対する彼の警戒心からであったかも知れない。もちろん、スピード嬢にすれば、グレイの煮えきらない消極的な姿勢に見切りをつけて、そのあてつけに活潑な彼女は自分より年下の男と結婚したともいえる\*\*\*。

いずれにせよ、スピード嬢がイタリア人ジョゼフ・マリーアと結婚したのは、グレイを嫌ってでも、グレイに嫌われてでもない。彼等が別かれて5年後の1766年に、グレイはロンドンで一度スピード嬢に会っている。彼女の夫ペリエイ男爵のロンドン在任中のことである。グレイはその時の印象を友人にもらし、「立派な女になっていて、以前より肥っていた」と云っている。グレイの死後、1775年にメイソンの『グレイの想い出』(Gray's Memoirs) が出版されることになった時、ウォルポウルはその一冊をスピードに送る約束をした。約束を忘れて果たさないウォルポウルを、翌1776年、スピードは非難して、一冊送ってもらっている。スピードは夫のヴィリィ城 (Castle of Viry\*) で、1783年、肥満による卒中 (apoplexy) で死亡。55才だった。丁度、母国イギリスを訪ねようとしている矢先のことだった。グレイ\*\*\*\*によると、ヴィリィ城はジュネーヴから数マイルのサヴ

\*\*\* グレイには生来、婦人や未知の人と同席すると、気疲れして、洗み込んでしまう性癖があった。スピードがグレイをあきらめた理由は、グレイのこの 'dullness' にあったのかも知れない。友人 James Brown の 'He never spoke out.' は、この寡黙さを云っているのかも知れない。cf. Thomas Gray: His Life and Works, by Lytton Sells, p. 90.

\*\*\*\* 前掲、1762年1月11日付けの Wharton あての手紙。スピード嬢の結婚を報じ、昔、大陸旅行した時の記憶から Viry 城の説明を加えている。

ィイ (Savoy) にあり、美しい湖を見おろしているという。

実のらぬロマンスの噂でおわった若き日の愛すべきスピード嬢とグレイとの出会いがマナー・ハウスであったことは、すでに周知のことだ。グレイはその出会いをうたった *A Long Story* の冒頭で、チューダー朝の建築の典型ともいべきこの大邸宅を描写している：

ブリテン島は、どこともいわぬ、  
いと古き大建築物がつつ立っている。  
ハンティングドン家とハットン家がそこに、  
妖精の手と力をかりて、

造ったのは、雷文模様の高天井、  
ことごとく勲功のしるし輝く鏡板、  
陽射さえぎる豪華な窓  
行けども続く廊下など。

この館は16cはヘンリ八世 (Henry VIII) 時代の1555年頃、グレイの詩にもあるように、ハンティングドン伯 (Earl of Huntingdon) が建立したもの。当時は、この村に人家はきわめてまばらであったという。もともと、この地は城塞の地であり、ノルマンの征服以前にまで遡る訳だが、文書にこのストウク・ポウヂズの荘園が現われるのは、E. ゴスによると、1291年の証文書 (deed) に出ているのがその最初だという。これは例のストウク・ポウヂズの地名の起源になったストウクのアミーシヤ (Amicia de Stoches) とポウヂイスのロジャー (Roger de Pogeis) の時代か、それより少し前のことかと思われる\*。その後、Edward III の1334年に、あの教会の事実上の建立者である裕福な貴族、モウリンズ公 (Lord Molines) のジョン・デ・モウリンズ卿 (Sir John de Molines) が荘園領主におさまった。以来、130年以上もの間モウリンズ家の所領が続く。そのあとをうけて、Edward 四世の1467年に、ヘイスティングズ

\* F. McDermott (*William Penn Thamas Gray & Stoke Poges*) は、ウィリアム征服王の土地合帳 *Domesday Book* によると、1086年にはWalterなる人物が、当時、'Stoches' として知られていたこの地を詳細不明の人物 William の後をうけて、所有しているという。ゴスの '1291年' は *Domesday Book* の1086年に改める必要がある。また、アミーシヤとロジャーが *Stoke Poges* におさまったのは同じ、F. McDermott は1300年としている。

公エドワード (Edward, Lord Hastings) がこの地を領有する。以後、4代にわたり、110年間におよぶヘイスティングズ家の時代に入る。マナー・ハウスはこのヘイスティングズ家の時代の建立。エドワードのつぎのヘイスティングズ家二代目領主\*\* ジョージ (George, Lord Hastings) は初代ハンティングドン伯 (First Earl of Huntingdon) に叙され、以来、ヘイスティングズ家はハンティングドン伯を世襲し名乗る。次の三代目領主は例の教会のヘイスティングズ礼拝堂を建立した人で、ヘンリー八世の1543年に第二代ハンティングドン伯を継いだフランシス (Francis, Lord Hastings, Second Earl of Huntingdon) であった。この第二代ハンティングドン伯たるヘイスティングズ3代目領主フランシスは高邁な精神と旺盛な事業心の持ち主とみえ、色々と新しい事業を断行している。グレイ時代のストウク・ポウヂズはこのフランシスに負うところが大きい。彼は先のヘイスティングズ礼拝堂のほかに、教会の西南に救貧院を創建、さらに、豪邸マナー・ハウスの建立者でもある。従来、領主の居館は古い城 (an old castle) であった。その城をフランシスは1555年に取払い、そこにエリザベス朝建築の大邸宅を建て、居宅とした。これがマナー・ハウスとして知られるものであり、18c末まで、およそ250年間にわたり荘園主の居館となる。

ヘイスティングズ家は、このフランシスの後の四代目ヘンリー (Henry) の代で、経済的に行きづまり、1580年頃エリザベス女王 (Elizabeth I) に没収、召し上げられて終る。その後、マナー・ハウスは、グレイが *A Long Story* の中で、「ふさふさしたひげと緑のくつひも」 'bushy beard and shoe-strings green' (l. 13) と、うたっている伊達男クリストファ・ハットン卿 (Sir Christopher Hatton) の手へ移る。このハットン卿はエリザベス女王の寵愛をうけ、大法官 (Lord Chancellor) にまでなった。この後、1600年頃、有名な「権利の請願」 (the Petition of Right) の起草者エドワード・コーク卿 (Sir Edward Coke\*\*\*) が領主におさまったという。ストウク・パーク (Stoke Park) にはロンドンのトラファルガー広場のネルソンのように高い柱に立つ彼の銅像がある。しかし、ハットン卿がこの館を所有した証拠はなく、一説\*\*\*\*には、彼の妻が (のちに、未亡

\*\* McDermott によると、1506—1543。

\*\*\* Speaker of the House of Commons (1593), Chief Justice (1606) など歴任。F. ペーコンの好敵手であった。

\*\*\*\* Sir Harris Nicholas : „*Life of Hatton*”

人になって)ヨーク卿と結婚したため、この館をクリストファ・ハットン卿が所有していたという言伝えとなったともいう。それによると、ヨークは1601年に王室よりこのマナー・ハウスを拝借、約20年のち、それをJames I がヨーク卿に下賜したのだという。ケットン・クリーマは、ヨーク卿の二番目の妻がハットン卿の姪で相続人であったためだ、という。このヨーク卿の時代に、エリザベス女王を一度マナー・ハウスに迎えたという。ヨーク卿の後、チャールズ一世(Charles I)の1634年、ジョン・ヴィリアーズ(John Villiers)が領主になっているが、この時期にチャールズ一世が囚人としてこのマナー・ハウスに幽閉されている。その後、1656年にジョン・ゲイヤー(John Gayer)が引継いでから、70年ばかりの間、ゲイヤー家の所領となる。ゲイヤー家二代目ロバート(Sir Robert Gayer)は、悪名高き時の王ウィリアム三世(William III)がストウクを訪問、マナー・ハウスを見たいと所望した時、「俺の家には絶対に入らせない」と、断固拒否したという話がある。ウィリアム三世は一步も足を踏込むことなく帰ったという。

このゲイヤー家よりマナー・ハウスを買取ったのがコツバム夫人の父親エドモンド・ホールスイ(Edmund Halsey)で、1720年頃のこと。彼はサザークのパーク通り(Park Street, Southwark)に有名なビール醸造所breweryを創立し、一時、バッキンガムシャー選出の国会議員にもなっている。この5年後、女婿、つまり、コツバム夫人の夫リチャード・テンプル卿(Sir Richard Temple, 1st Viscount Cobham)があとを継ぐ。夫テンプル卿は1749年に死亡し、その後、コツバム夫人(Anne, Cowager Viscountess Cobham)が1760年3月20日に没するまでマナー・ハウスの主人におさまるのである。グレイがマナー・ハウスに関係するのはこの時期だ。この間の1758年8月には名優 Garrick 夫妻がここに一週間滞在し、グレイは連日、この邸宅を訪ねて、その相手を務めさせられている。

1760年、コツバム夫人の死後、アメリカのペンシルヴァニアの建設者ウィリアム・ペン(William Penn)の二男トマス・ペン(Thomas Penn, 1701-1775)がこのマナー・ハウスを買収し、以後、19c半ばまで100年近くの間、ペン家の所領するところとなる。ペン家の初代荘園主のトマスはマナー・ハウスを居宅としていた。領主の邸宅としては、これを最後とした。あとを継いだ息子のジョン(John, 1760-1834)は、アメリカ帰りで、この古風なチューダー建築がジョージ朝趣味には合わなかったか、一部、西翼棟(west wing)のみを残し

て、1789年に惜気もなく引倒してしまった。このジョンは生涯独身で、ヘイスティングズ三代目のフランシス同様、事業心に富んだ、多才な男であった。彼は破壊もしたが、建設もした。教会境内のグレイ埋葬を刻したタブレットも、墓地のはずれのグレイ記念碑も、エドワード・ヨーク卿の記念塔も、ヘイスティングズの救貧院を倒し、新しく教会の北1/4マイルばかりの所に建てかえたのも、また、邸内の敷地(パーク)を整備したのも、すべて彼の行なった事業であった。グレイ時代のストウクはヘイスティングズのフランシスがつくったとすれば、今日のストウク・ポウズズはこのジョン・ベンがつくったと云えよう。

ジョンがマナー・ハウスを取崩したのは、大修理を必要とするほど老朽化していたことが必ず挙げられる。しかし、これは一応の口実であったであろう。おそらくはハバカク\*(H. John Habakkuk)の云うように、邸宅こそは、領主一門の地位を具現し家門の伝統を保存する貯蔵庫であった。新しく家門を起す者が既存の邸宅を建てかえたり、移転したりしたのは、趣味が違ふとか、部屋数が少ないとかいった理由ではなく、本当は邸宅を建てるのが、家門を起す不可欠な条件だったからであろう。

一部取りつぶしを免がれた残存のマナー・ハウスは、往時の姿を失ってはいるが、それでも今にその余韻を漂わせている。1834年、ジョンのあとを継いだ弟グランヴィル(Granville Penn, 1761-1844)の代にはペン家の家運も傾きはじめ、その死とともに所領も分散してひと手に渡り、息子グランヴィル・ジョン(Granville John Penn, 1803-1867)が1859年までその余命を保つのがやっとであった。ストウク・パークは1848年にヘンリー・ラブーシェア(Hon, Henry Labouchere)へ売渡されたようだが、マナー・ハウスもこの時売却されたかどうか。1852年頃は、有名な動物画家エドウィン・ランジー(Sir Edwin Landseer\*\*)がこのマナー・ハウスで仕事をしていたという。一時は既(stable)になっていたこともあるようだが、1958年までは住宅として利用されている。最後の住居者は、当時、未亡人のフライ夫人(Mrs. Frye, a widow)であった。1958年、ノーエル・モップズ氏(A. Noe Mobbs, 当時 Sir.)がこの

\* 『18世紀イギリスにおける農業問題』；ハバカク著。川北稔訳。(未来社)。

\*\* 有名な“The Morarch of the Glen”はストウク・パークに飾ってあったと云われる。のち、この地で発狂す。

古いマナー・ハウスを購入。が、居住はせず。1971年までロンドンの‘the London Diocesan Fund’に、年1シリングで賃貸し、会議堂 (Conference House) として使用された。同年、モップズ家から、当時の行政区イートン地方郡 (Eton Rural District Council) へ移管された。1974年からは行政改正でベコンズフィールド郡 (Beaconsfield District Council) の所有。但し、1980年四月より郡名が改称\*されたため、正しくは現在の所有主は「南バッキンガムシャー郡」(South Buckinghamshire District Council) である。このマナー・ハウスは1971年、郡庁へ移管されて以来、長く空家になっていた。1975年になって、やっと賃借希望がでて、郡でも本気で賃貸を考えていることが、この年の12月1日(月)の「イヴニング・メール」紙 (Evening Mail) で報じられている。それによると、「エリザベス I 世女王もここに泊す—申込みはいかが?」という派手な見出しで、大要、次のように書かれている：

‘国際的大手 2 会社が目下、このエリザ朝の空家邸宅の借用を申込んでいて、さらに次々と申込みが見込まれている。この建物はベコンズフィールド郡庁の所有するストウク・ポウヂズのマナー・ハウスである。2社のうち、1社は業務を拡張し新部門をつくらうとしており、他の1社は本社をこの地に移したいと考えている。賃貸期間は14年で、さらに7年間の任意延長ができる。郡では来月6日の会議で、すべての申込みを審査対象とするといっている。’

この新聞記事には、他に、エリザベス I 世女王一行がここに14日間滞在し、エドワード・ヨークの歓待をうけたことや、近くのベコンズフィールドの国立映画学校の映画班に恰好の舞台背景としてよるこばれていることなどが載っている。

この結果、1976年から「ティ・ティ・エス社」‘T. T. S.’なる会社がマナー・ハウスに入っていて、その高級事務所 (prestige office) として用いている。この会社は土木工事関係のコンサルタント会社、consultant engineerings’で、製造会社ではない。高速自動車道など大型工事の資材、材料等について請負会社に見積り助言などをするのだという。上記のイヴニング・メール紙

\* Mrs. Hodsonによると、この郡名に変更があり、1980年4月1日より「南バッキンガムシャー郡」(South Buckinghamshire District Council) と改称されている。今度の改正は呼称のみの変更であったという。

に載っている会社の一つと思われる。館内観覧は郡庁の許可を得ることが必要。

**Stoke Poges Gardens と Penn-Gray Society** ここで、グレイには直接関係はないが、「ストウク・ポウヂズ公園」と「ペン-グレイ協会」に触れておきたい。ペン家の没落後、荘園主は数代変わったが、所領の分割売買などで弱体化し、もはや、その規模において昔日の荘園領主の比ではなくなった。1928年(公園事務所のホヅル女史は30年代という)に、のちにマナー・ハウスを買取ったノーエル・モップズ氏\*\* (A Noel Mobbs, のちに Sir になる) が、ストウク・パークとパーク・ハウスを買収した。モップズはその翌年の29年頃に\*\*\*、ストウク・ポウヂズ教会の牧師クレア師 (the Rev. Mervyn Clare) などを加えて、「ペン・グレイ協会」を設立した。会長にはイートン校学寮長モンタギュー R. ジェイムズ (Montague Rhodes James) を迎え、多数の貴族聖職者を会員に集めている。協会設立の狙は教会周辺の土地買売の侵攻をおさえ、一種の風地保護地区にしようということであった。その具体的目標は次のようなものであった。①教会周辺の緑地を永遠に保存すること。②マナー・ハウス及び教会隣接地を買収し、これを協会本部とすること。③教会周辺の土地を協会所属の公園にすること。④教会に墓地拡張のため土地を寄贈し、会員希望者に分譲すること。⑤教会および博物館への訪問客より収益を上げ、教会周辺の土地、教会境内、グレイ記念碑、マナー・ハウスの保存に当てること。

しかし、この協会は1935年、グレイズ・フィールドの南の一角に記念公園 (Memorial Gardens) が開園されて、「教会周辺の土地を保存する」(‘preserve the land surrounding the church’) という目的を果したとして、その機能を停止、自然消滅した。ノーエル・モップズ氏は、それと入れかわりに、株式会社「記念公園会社」(Memorial Gardens Ltd.) を創立し、従来のペン・グレイ協会に代って、この会社がかつての荘園主

\*\* Mrs. Hodsonによると、the Provost of Eton だったことありというが詳細不明。

\*\*\* 1930年初版の William Penn Thomas Gray *and an account of the Historical Associations of Stoke Poges*, (specially Compiled for The Penn-Gray Society by F. McDermott) に、この協会の新会員の加入を呼びかけているところから、設立は1929年か30年頃かと思われる。



所領ストウク・パークを管理した。1971年、国会の法案により、58年以来モップズ家が所有していたマナー・ハウスとともに、ストウク・パークの一切がモップズ家所有から離れて、地方自治体の管理下に移管され、「記念公園株式会社」は解散した。以来、郡庁の「ストウク・ポウヂズ公園事務所」(Stoke Poges Gardens)がこれに取って代っている。

**Stoke Park** ストウク・パーク (Stoke Park) といえば、通常、ストウク・ポウヂズの荘園地主の所領する広大な屋敷を意味するのであるが、その屋敷内の中央付近に、1789年にジョン・ベンが、引倒した古いマナー・ハウスに代る地主邸として、新築した白壁の豪邸をいうこともある。この建物はハウスをつけて、ストウク・パーク・ハウス (Stoke Park House) と呼ぶことが普通であるが、単に、パーク・ハウスと云われることもある。このイタリア風の豪邸パーク・ハウスは、ジョンが風景画家の Alexander Nasmyth の立案で着工し、建築家 James Wyatt に完成させたもの。1928年から30年間ノーエル・モップズ氏の所有。1958年、モップズ氏の手からイートン地方郡の手に移った。現在はベコンズフィールド郡を経て、1980年4月の郡名変更にもない、南バッキンガムシャー郡庁 (South Buckinghamshire District Council) の所有で、ストウク・ポウヂズ公園事務所の管理下にある。大部分はゴルフ・クラブ (the Stoke Poges Golf Club) が使用し、一部、イレクトロニクスとコンピューターを主として扱う世界的会社「プ

レスイー社」(Plessey Ltd.) が高級事務所 (prestige offices) として用いている。周囲の屋敷ストウク・パークは、東側(教会の南)は記念公園 (Gardens of Remembrance), 南側は池をはさんで運動競技場 (Playing Field), 西と北は広大なゴルフ場 (Golf Course)。

**Church Cottage** 教会入口近くから、すぐ南に見えるバラの美しい建物はチャーチ・コティヂという。チャーチ・レイン (Church Lane) の Car Park の向い近くから入る。高い煙突、突出した破風はチューダー風。牧師館であったことはないという。元来はマナー・ハウスの別荘 (lodge house) だったらしい。かつてはベン・グレイ協会本部及び資料博物館であった。現在も当時の展示物が保存\* されている。つづいて、記念公園株式会社事務所。1971年から郡の所有で、現在、郡庁のストウク・ポウヂズ公園事務所、およびその応接室。

**West End House** 1739年頃伯父ロジャーズ夫婦がブリットウェルから移転し、やがて母と伯母メアリも引上げて来て、グレイの帰省先となった家は、マナー・ハウスから北へ1マイルばかりのところにある。うしろに公有地 Common を控え、当時、ウエスト・エンド・レイン (West End Lane) にあったこの家はウエスト・エンド・ハウス (West End House), ウエスト・エンド・コティヂ, ウエスト・エンド・ファームなどと呼ばれていた。しかし、のちに、大拡張改築されてからはストウク・コート (Stoke Court) として知られる。



1959年 Miles Laboratories Ltd. による修復後のストウク・コート南西面

\* 保存物には次のようなものがある：グレイ、ウォルポウル、ベンの肖像画。Elegy の手稿ファシミル。グレイ年譜表。グレイ詩集。伝記、Elegy 数版のほか、我が

福原麟太郎氏のグレイ研究(「調理法」に関する付録つき)、Traveller's Companion (by Gray, 1770) 等、グレイ関係の書籍。

グレイはここで生活を共にした近親者はすべてここで失った。親友ウエストの死に驚いたのもこの家であった。それは彼にとって何とも無気味で不吉な家だったにちがいない。これが10年足らずの間の出来事だとすれば、なおさらのことだ。だが、むしろ、暗い面ばかりではない。うれしい来客もあった。1750年の8月には、かのマナー・ハウスから華やかな女軍が不意打をかけ、ポーチをくぐるなりいきなり上り込み母や伯母を驚かせ、「テーブルに呪文を残して行った。」（‘And left a spell upon the table.’）また、時には教区牧師のダックワース師の訪問もあった。Ode on the Spring や Eton Ode などを書いたのも、Elegy を完成させたのもこの家であった。この家は、ウエスト・エンド・レイン（West End Lane）は北端、今日、ストウク・コート・ドライブ（Stoke Court Drive）のつきる所に位置し、その道路に面する屋敷の奥に小じんまりと南向きに建っていた。2階建てで、レンガ造りのただの農家。表入口に田舎風なポーチがあったという。屋敷内には、後に、Gray's Walk として知られる櫛の木の散歩道があった。

このウエスト・エンド・コティヂの最古の記録は1502年\*で、少なくともこの年までRichard Bulstrode（1473年バッキンガムシャの sheriff）の所有になっていた。以後、1617年までこのバルストロード家が六代に亘って所有。バルストロード家は名門の家らしく、Richard の他に2人の Sheriff\*\* を出している。その後、ストウク・ボウヂズのヨーマン William Groome を経て、1636年には Lambeth の Walter Dobson と John Goodwin の共同所有。1641年になって、彼等から、ロンドンの織物商ジョージ・ダウンズ（George Downs）なる男がここに家屋敷を購入したという。彼は7年後の1648年には、母屋を改築している。その年号‘1648’が表広間の炉（fireplace）に1869年まで残っていたという。1653年には、ダウンズからロンドンルーイシャム（Lewisham）のレイノルド・グレイアム（Raynold Grahame）の手に移る。グレイアムはこれを賃貸に出し、王党派の豪勇、陸軍大佐ウィリアム・レッグ（William Legge）が借家。それを王政復古の1660年に

ウエスト・ハム（West Ham）の商人ニコラス・ソーター（Nicholas Salter）がグレイアムより買取る。以後、170年間ソーター家\*\*\*がこの家屋敷を所有する。グレイの時代のウエスト・エンド・コティヂの所有主はソーター一家であった訳だ。ソーター家の所有になってからは、この家は何人かの賃貸契約者（leaseholder）を転々としてグレイの伯母の夫ジョナサン・ロジャーズ（Jonathan Rogers）の手にするところとなる。ロジャーズの死後は、伯母のアン（Mrs. Rogers）がこれを引継いだ。が、1758年9月30日のこの伯母の死で、最後の共同生活者を失うと、グレイはこの家屋敷の永代賃借権（lease）を放棄した。グレイはそれから2ヶ月余りをアン伯母の死後の後始末に費やし、気に入った陶器や家具はロンドンのサザンプトン・ロウ（Southampton Row）の友人ホートン宅へ送り出し、12月12日を最後に独りこの家を払って、そのホートンの許へ身をよせた。あっけない離郷ではある。翌年、59年9月23日、グレイはマナー・ハウスのスピード嬢に乞われて、もう一度ストウクを訪れる。だが、この時はマナー・ハウスに3週間ばかり滞在しただけで、もはや住みなれたウエスト・エンド・コティヂとは無縁の人であった。そしてこれがグレイの最後のストウク訪問でもあった。

グレイのあと\*\*\*\*、およそ70年間、ウエスト・エンド・コティヂは所有主のソーター家で居住したり、賃貸されたりしていたが、1829年、ソーター家（Christopher Salter）から外科医のヘンリー・ウィルマー（Henry Willmer）へ売却された。それをストウク・パークの荘園主ベン家の三代目グランヴィル・ベンが1844年に買収。だが、グランヴィルは購入後間もなく同年9月に死亡。その息子グランヴィル・ジョン・ベンがその後をうけ、翌1845年に拡張改装した。これが第一回の改築である。赤レンガには漆くい（stucco）をかけて外装し、窓に改良を加え、全体として擬テューダー風に仕上げた。そしてグランヴィル・ジョンはこれをストウク・コート（Soke Court）と改名し、玄関入口の上に自分の紋章（coat of arms）をかかげた。これは今日も残っている

\*\*\* この間にソーター家より、Buckinghamshire の sheriff が2名出る。1687年に二代目息子の Nicholas。1812年に Christopher。

\*\*\*\* グレイのあと、1758年から1760年まで William Hart なる人物が入居。その後、約4年間（1761—1764？）の空家の時期があつてから、少時、詳細不明だが、1774年頃再び家主のソーター家が一時入居。

\* マイルズ・ラボラトリズ社の「ストウク・コート年譜」による。

\*\* 1503年には Richard のあとを継いだ Edward Bulstrode が、また1586年には Richard から数えて5代目の同名 Edward が、それぞれ Sheriff of Bucks. になっている。

彼はグレイ当時の部分は注意深く原形を保つようにしたが、天井や壁面に精巧な漆喰の細工を施した絢爛豪華な客間 (drawing room) を一階に加えるなどしている。今日、会議室になっている部分だ。この四代目のベンも1851年にはシロップシャーのコールブルックデイル (Colebrookdale, Shropshire) の製鉄工場主 A. ダービー (Abraham Darby) へ売却。このダービーが更に拡張増築し、「使用人棟」 (Servant's Wing) を建増した。2回目の改築である。1872年には、ダービーからニューカースル (Newcastle) の製菓業者 C. オールヒューゼン (Christian Allhusen) へ転売される。以後55年間、ウエスト・エンド・ハウス改めストウク・コートはオールヒューゼン家の所有。1880年代に入ってすっかり改修、拡張され、もはや昔の簡素の痕跡はないと、E. ゴスも云うように、このオールヒューゼン家の手で第3回目の大改造が行なわれたことは確かだ。オールヒューゼンは間口を大きく拡げ、正面には自家の紋章を、背面の壁にその改築年号をはめ込み、建物のいたるところに自分の頭文字を入れている。今世紀に入っても1913年に、オールヒューゼン家は再び拡張をはかっているが、後側の壁面に入っているもう一つの家紋は、その年号とともにその時のものだ。1927年に、F. H. オールヒューゼン (Frederick Henry Allhusen) が売却して、ストウク・コートはオールヒューゼン家の手をはなれた。ベン以来、過去三回の改修改築を通して、ウエスト・エンド・ハウスは二階建ての農家から、一部をのこして、三階建ての豪邸ストウク・コートにすっかり変身したのである。

1927年以後、このストウク・コートはいろいろの所有者の手を次々\* とわたり、個人の邸宅、カントリ・クラブ、そして始舞にはテレビ受像機の倉庫にまで没落する。1953年、ロクシー商事会社 (Roxy Trading Company) がこの家屋敷を取得。「グレイの散歩道」

‘Gray’s Walk’ として知られる屋敷の一部はバッグショット製材所 (Bagshott Sawmills) へ売却。この製材所は「グレイ散歩道」のまわりの樾の木を伐採した。

\* Reverend David Lee Lee-Eliot (1927—1928); Stoke Court Ltd. (1928—1935); Thomas Cannon Brookes (1935—1941); A. R. Bingham & Company Ltd. (1941—1951); Kenneth Alastair MacKenzie (1951—1953); Roxy Trading Company Ltd. (1953—1954) (マイル・ラボラトリーズ社: *Chronology of Stoke Court* による.)

『グレイ伝』のケットン・クリーマーがここを訪ねたのは、この頃だったのであろう。「私〔クリーマー〕がこの前ストウク・コートを訪ねた時は、「グレイの散歩道」の木々は伐られ、家はテレビの倉庫として用いられていた。グレイが居たと思われる小さな部屋はことごとく、受像機の入った箱が天井までうず高く積まれ、階上へも同じ箱がベルトコンベアで運び上げられていた.\*\*」バッグショット製材所は、その後、この「グレイの散歩道」を隣村のウエッサム (Wexham) の建設会社ハートレー (Messrs. J. & E. C. Hartley) に売却処分した。

建物の方は、その後、57年までアパート及び映画テレビの撮影所として用いられ、57年頃から再び商事会社などの倉庫になっていたが、1959年には廃屋同然。崩壊寸前で、取り払って近代的なアパートに建てかえられようとしていた時、薬品会社マイルズ・ラボラトリーズ社 (Miles Laboratory Ltd.)\*\*\* が買取り、辛くもその消滅を救った。マイルズ・ラボラトリーズ社はこのストウク・コートを縮小修復した。いわば、4回目の大改築だ。修復されたストウク・コートの一部は、過去20年間、同社の英国国内本部事務所及び研究所として用いられて来た。だがその後1975年には新たに研究棟 (the Compton Wing) を加えるなど再び拡張されもはやグレイ時代の名残りは殆んどとどめず、わずかに建物のそばの散歩道 walk にグレイ生前の跡が偲ばれるばかりであった。

ところが、昨年1979年1月6日(土)の夜に、この修復された歴史的ストウク・コートはマイルズ・ラボラトリーズ社が増築した新しい部分を残して、火事で焼けてしまった。この夏に、ホゾル女史が送ってくれた1979年1月22日(月)付けの地方紙「ウインザー・イクスプレス」 (Windsor Express) の切抜きは、「火焰、歴史を焼く」Blaze burns History という大見出しに、サブ・タイトル「50万ポンドの火事、ストウク・コートを焼

\*\* *Thomas Gray: A Biography*, by Ketton Cremer 1955, p. 95. 上記、引用文は補足的に脚注として加えられている。

\*\*\* Mrs. Hodsoll によると、この会社は ‘pharmaceutical research’ を行なう国際的会社で、Glaxo Group の一つという。同社の社長 Sutherland 氏によれば、現在、ストウク・コートにはおよそ250名のスタッフをかかえているという。製造工場を Wales の Bridgend に持っているという。



1959年 Miles Laboratories 社による修復前のストウク・コート正面



1959年の修復後のストウク・コート正面

払う」(£ ½m fire guts Stoke Court) をつけて、夜空に煙をあげて炎上中のストウク・コートの写真入りで、この火事を大きく報じていた。それによると、実験

用動物は救出に成功したものの、由緒ある貴重な内装及び装飾品は重役室と共に全焼。損害は少なくとも50万ポンド。出火場所が電話交換台近くで、連絡に手間取り、

被害を大きくした。原因は、警察では、放火ではなく漏電とみている。記事はこの邸宅の来歴に触れ、最古の記録は1522年としている。当然のことながら、グレイについても少し触れてはいるが、この地に母や伯母と居住したこと、彼女等の死後、賃借権を放棄したこと、*Elegy*を書いたことなどで、新しいことは何もない。マイルズ・ラボラトリーズの社長兼専務取締役役のサザランド氏は、本年10月、目下、この焼けおちたストウク・コートは再建中で、1981年2月に復興完成する予定だと云っている。同氏によると、正面壁面は辛くも全壊をまぬかれていて、再建される建物はこれを用いて、焼失前の旧姿に寸分たがわず復することになるらしい。いずれ、立派なストウク・コートが再興されようが、今度こそ、グレイの時代とは無縁のものになっているであろう。惜しいことをしたものだ。

ウエスト・エンド・ハウスは焼けて灰になっても、ストウク・ボウヂズでは、今もなお、「『名声』がPなんとか氏の形をかりていて」、グレイを「村中のみんなが知っている」。このさきとも、村の誇りとするに変えることはあるまい。1971年は、詩人の死後200年に当り、グレイ没後二百年祭 (*Bi-centenary of Gray's Death*) が開催された。村民会館 (*Village Hall*) では展示会が開かれ、教会では、特別礼拝式典が挙げられ、*Elegy* の朗読が行なわれた。これはグレイへの正当な評価である。

こうして、グレイ・カントリーに於けるグレイの足跡をひとわり辿ってみると、ここにはグレイの姿が、象徴的に凝縮された形で現われているように思われる。彼のひととなりの一つの特長である「心のやさしさ」が、この地の教会の墓石に母想いの心として象徴されているといえる。彼は、事実、友人ウエストにむかって、自らの美点として他人の気持ちが分かり、心をもとにする心「シンパシー」(*sympathy*) を挙げている。それをグレイはセンシビリティ '*sensibility*' と呼び、「他人の悲しみ苦しみを知り、感ずる心」 ('*to know and feel another's woe*') だと、説明している\*。このグレイ・

カントリーで経験する一連の不幸の中で、彼のその「センシビリティ」は弁証法的にとぎすまされ、深められて行ったような気がする。北スコットランドよりおこって時代の流れとなった自然文学にもいち早く呼応して、グレイが彼特有の自然観を持ちえたのも、このグレイ・カントリーの自然に負うところが大であろう。当時流行の「心地よいメランコリー」の気風の根は、どうやら、バーナムにおける若きグレイと前時代の老劇作家サザーンの邂逅に象徴的に見られる思いがする。サザーンが代表する流行のメロドラマのペースと、グレイが代表する新しく起った自然観賞が結びつければ、自然詩や *Pastra* に見られる甘美な憂鬱、つまり、「心地よいメランコリー」となるのは必然のような気がする。

この自然観賞は、のちに、ワーズワースを代表とする浪漫派の湖畔派へと受継がれ、深められる。一方、イートン校の14cの古い建物、マナー・ハウスのチューダー建築、ストウク・ボウヂズの教会やそこにある古い墓石、バーナム・ビーチズの原生林などは、グレイの心を遠い過去へいざない、大英博物館での古文学研究への誘因となり、ひいてはウエールズ、北欧、アイスランド等の古伝説を題材とする作品群の源泉になったとも考えられる。そして、この遠いものへのいざないは、のちに、キーツやシエレーなどロマン派の華へとつながって行くように思えてならない。いわゆるグレイ・カントリーにおけるグレイには、種々の問題が内在し、提起されていることに気づくのである。

\* グレイと、大体、同時代のスコットランド人、アダム・スミス (*Adam Smith, 1723-1790*) もグレイと全く同じ概念を導入し、その主著における理論の基本の一つにすえている。特に、1759年刊行の *The Theory of Moral Sentiments* では、この概念を '*sympathy*' と呼び、いわば「同心の理論」を展開し、グレイと軌を一にしている。これは単なる偶然であろうか。スミスはロンドンに友人は多かったが、グレイとどんな関係があったかどうか、興味深いことだ。

(昭和55年9月1日受理)